
Gambler Life

神崎颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gambler Life

【Nコード】

N3490B

【作者名】

神崎颯

【あらすじ】

東京のとある建物の地下にギャンブルに飢えた狂人達が集まる場所があった。その場所は『アンダーグラウンド賭博場』と呼ばれている。その中にある1つ『ポーカー』へと足を運ぶ1人の男を見てみましょう……

アンダーグラウンド賭博場に來た俺は真っ直ぐ『ポーカー』のコーナーへ行った。

テーブルの周りを囲む椅子は丁度1つ空いている。
そしてその空いた椅子にドスンと座った。

俺の真正面には新島、右隣りにはデビット、左隣りには田島と呼ばれる人物が座っている。

見た感じこいつらはタダ者ではない。恐らく世界で見てもトップ10に入る猛者だろう。いや、どこがどういう風に猛ているのかは分からないがとにかくオーラが違う。

今までの人生を全てポーカーに注いだかのようにも見える。

だが、俺だって同じこと……

最初に発した言葉は『ロイヤルストレートフラッシュ』らしいし、小学校低学年の頃には既に大人達と現金をかけてポーカーをして稼いでいたし、義務教育が終わる頃になったらトランプで人を斬れる様になった。

『トランプの神に愛された男』の異名を持ち、今まで生きてきた。
だからこの勝負……負けられない！

ディーラーは新島らしい。

新島からカードが5枚配られた。

《ハートの9》

《ハートのQ》

《スペードの3》

《スペードの8》

《スペードの9》

である。

普通の人なら9同士を残しチェンジするだろう。
だが俺はトランプの神に愛された男である。

スペードでフラッシュを狙う。

とりあえず1度目のベッティング・インターバルはコールしておいた。

そして《ハートの9》と《ハートのQ》をチェンジする。

……来たカードは《クロバーの8》と《ハートの8》である。
狙ってもいないのにスリーカードが揃った。

しかしこの勝負は恐らく負けた。

新島と田島がノーチェンジなのだ。よっぽどの自信があるのか、それともハツタリか……
ちなみにデビットは全取換だ。そうとうのギャンブラーだ。だがそれで勝てたら奴は神である。

俺は2度目のベッティング・インターバルで悩んだ末、ドロップした。恐らく奴等はそうとう良い手だろう。奴等の眼には自信の二文字が刻まれていた気がしたからだ。

『Show down』

新島がハンドを見せる。

「4カードだ」

新島がウザいくらいニヤけながら言う。その顔はまあウザいウザい。見事に2で揃えている。一発目でこれが来たのだから新島はそうとうの運の持ち主だ。

そして田島がハンドを見せる。

「ワンペア」

ハツタリかよ！

なんて度胸の持ち主だ……

ギャンブラーにも程があるぞ。あるいみスゲエよ田島。

そしてデビットがハンドを見せる。

「Royal straight flush……」

強ッッッ！！！！

デビット強ッッ！！

全取換してロイヤルストレートフラッシュかよ！

運が強すぎるだろ！！

こいつ間違いいねえ……神だ！ギャンブルの神そのものだ！！こいつにだけは勝てる気がしねえ……

『Hahahahaaha!!!!』

ポットのチップを両手を伸ばして取りながら派手に高笑いするデビット。超ウゼエ。マジ殺してえ。

俺は殺意で血が出る程握った拳を静かに解いた。

そして2戦目。

やはり俺もトランプの神に愛された男らしい。

《クローバーのA》

《クローバーの10》

《スペードのA》

《ハートのA》

《ダイヤのA》

前戦の新島状態。

思わずニヤけてしまう。

このポーカーはノーリミットゲームなので賭け金に上限が無い。
なので1度目のベッティング・インターバルでは皆が度肝を抜くよ
うな金額をレイズした。

不敵な笑みを浮かべる俺を見ながら他の奴等もコールする。

そして《クローバーの10》をチェンジする。

ここのポーカーはワイルドポーカーなのでジョーカーが存在する。
なので上手くいけば最強のハンド・5カードが完成する。

まあそろそろ確立なんて天文学単位なのだが。

しかし何故さっき新島は5カードを狙わなかったのだろうか。

来たカードは案の定ジョーカーでは無かった。

他の奴等の様子を見ると新島が3枚、田島が2枚、デビットがまた
も全取替だ。

2度目のベッティング・インターバルではチェックしておいた。
デビットが怖いので。

誰もドロップしないあたりに奴等のギャンブル魂を感じる。

『Show down』

新島がハンドを見せる。

「3カードだ」

7で揃えている。やったじゃん、ラッキーセブンだよ新島。

そして田島がハンドを見せる。

「フラッシュ」

おお、見事にハート一色だ。

こいつらはやはりなかなか運が良い。

そして問題のデビットがハンドを見せる。

「Royal straight flush……」

またかよっっっ！

強すぎるだろ！！……ってあれ？

Aは俺が全て持つてゐるからジョーカーがないと揃わないはずだけど
……

そう俺が思った瞬間、後ろから黒服を着てサングラスをかけたガタイの良い黒人が3人歩いてきた。

そしてデビットの後ろ襟を掴むとその黒服集団はそのままデビットを椅子から乱暴に引き摺り下ろし、ズルズルと引っ張っていった。
引っ張られていく途中、デビットの悲しげな声が何度も聞こえてきた。

なるほど、いかさまだったのか。

どおりであんなに揃うわけだ。

2回戦とも全取替してたのはイカサマをばれにくくするためか。

その少し後、遠くから銃声が聞こえたが、聞こえなかったことにしておいた。

そして勝負に勝った俺はポットにあるチップを独り占めした。

いやぁ良い気分だ。

これで1ヶ月は働かないで済むぜ、はっはっは。

じゃあ今日はここら辺で切上げますか。

そう思った俺はニヤけながら席を立った。

「待てよ！」

と田島が言う。

「お前、ここで切上げちまったらギャンブラーの名が廃るぞ！」

と新島が言う。

「お前等、要するに負けっ放しじゃ家族に見せる顔がねえって言い
たいんだろ」俺は軽くあしらった。

「独身だバカヤロー！！！」

新島と田島がハモったせいで物凄い大きく悲痛な声が場内に響く。
2人ともそんな声張り上げなくてもいいじゃないの……

「まあとにかくあれだ、座れ」

「座ってくださいだろ」

「座れ」

「……」

「座ってくださいバカヤロー」

「誰がバカヤローだ」

「座ってくださいクソヤロー」

「誰がクソヤローだ」

このままでは禅問答になると悟った2人は最終的に土下座をしてきた。みっともない。しかしそんな2人が哀れに思えて来たのも事実で、俺は不本意ながらもう1戦だけ相手をしてやった。

5枚のカードが配られる。

《スピードの4》

《スピードの3》

《スピードの2》

《ハートの5》

《クロバーの5》

今回は5を1枚チェンジしストレートを狙うか。

そして1度目のベッティング・インターバルで新島はなんと俺の全財産と同じ金額をベットした。

新島は不敵な笑みを浮かべている。

つまり挑発している。

乗ってこい、と。

この俺を誰だと思ってやがるんだ。
トランプの神に愛された男だぞ。

もちろん乗ってやった。

そして《クローバーの5》をチェンジした。
すると狙い通り《ハートの6》が来た。
ストレートの完成だ。

新島は2枚、田島は1枚交換した。

2度目のベッティング・インターバルは新島も田島も全額だったのかチェックした。
俺もちろんチェックした。

『S h o w d o w n』

新島がハンドを見せる。

「……3カードだ」

溜め息混じりに言う。

恐らくフルハウスを狙ったのだろう。

すると突然田島が笑いだした。

「……何がおかしい」

「俺の……勝ちだ」

田島がハンドを見せる。

「ストレートフラッシュだ！」

何イイイ!!!???

この土壇場でストレートフラッシュだとお!!!?

なんていう強運！ 恐るべきギャンブラースピリット！！

……ってことは、アレか。

俺負けか。

全財産0円だ。

「どおする、もう1戦やってあげようか？」

田島が物凄く気持ち悪く笑いながら言う。

「……お願いします」

プライドが傷つく……

傷心だよクソ……

だが仕方がない、我慢しろ俺。

「なあに？ 聞こえないなあ？」

田島……お前絶対殺すからな。次の勝負俺が勝ってお前スカラカ
ンになったら絶対殺すからな。

「お願いします！ もう1戦やらして下さい！」

結局俺は土下座をして、もう1戦やれることとなった。

金はフロントから借りた。

ちなみにフロントで借りた金は借りた本人がその日中に返せない
みると臓器を売る羽目になる。

まったく、ここは恐ろしい場所だ。

そして再戦。……

その後、俺は10回戦行ったが全て負けた。
負ける度にフロントへ走り金を借り、テーブルに戻る、を繰り返した。

俺の借りた額はもう億単位になってしまった。

すると後ろから例の黒服集団がやって来て、俺を引き摺っていく。

「すみません！ 絶対明日までには返すんでもう少し待ってください！
い！ お願いします！」

引き摺られながら俺は黒服集団に向かって叫ぶ。

すると黒服集団の1人がカタコトな日本語で答えた。

「ルールデスノデデキマセン」

そして俺は謎の部屋に連れてこられた。

「あの……もしかして……」

「ルールデスノデ」

そして黒服の1人が服の内側から拳銃を取り出し、俺に向けた。
そしてこう言った。

「……グッドラック」

室内に銃声が響き渡る。

皆もギャンブルをやる時は引き際に引くんだよ。

嗚呼、さらば俺の人生。
短いようで長かった。

さらば、俺の Gambler Life…

(後書き)

Wikipediaのポーカーを参考にしながら書きました。
やはりポーカーは面白いですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3490b/>

Gambler Life

2010年10月28日07時40分発行